

令和3年度福島県立美術館運営協議会議事録

- 1 開催日時 令和4年3月10日(木) 10:00～11:30
- 2 開催場所 県立美術館2階会議室
- 3 委員数 10名
- 4 出席委員数 8名
- 5 議題

(1) 令和3年度事業の概要について

ア 令和3年度事業の状況について

イ 観覧者数等の状況について

ウ 令和3年2月13日発生地震被害への対応状況について

(2) 福島県立美術館運営計画(案)について

(3) 令和4年度事業計画(案)の概要について

(4) その他(福島県立美術館の運営等について)

6 議事

○福島県立美術館長挨拶

日頃から当館の運営に多大なる御支援、御協力をいただき心より御礼申し上げます。福島県でもようやくまん延防止等重点措置が解除されたが、昨年度に引き続き、今年度もコロナ禍による各種事業の中止が続くなど、美術館本来の活動が大きく制限された1年であった。しかしながら、当館では、昨年5月のリニューアルオープン以降、コレクションを活かした特集展示や実行委員会形式による2つの大型企画展、福島ゆかりの作家を取り上げた企画展などを開催し、創作プログラムなど教育普及活動への参加者も合わせて、2月末現在で12万人を超える多くの来館者の方々においでいただくことができた。殺伐としたコロナ禍にあって、改めて芸術文化の必要性や美術館の存在意義を示すことができたのではないかと自負している。引き続き、魅力ある展覧会の開催を始め、多くの県民の皆さまに喜んでいただける活動を続けていきたい。本日の運営協議会では、令和3年度の事業概要や令和4年度の事業計画、さらには、県の新たな総合計画に合わせて初めて策定する美術館運営計画などについて、忌憚のないご意見を頂戴したい。

○出席委員及び事務局等出席職員の紹介

大沼博文会長が、議長として議事を進行した。

(1) 令和3年度事業の概要について

令和3年度事業の概要について、事務局が資料に基づき説明を行った。

《質疑応答》なし

(2) 福島県立美術館運営計画（案）について

福島県立美術館運営計画（案）について、事務局が資料に基づき説明を行った。

《質疑応答》

【半沢委員】：入館者数にかかる指標について、10万人という目標数値は、過去の実績から考えると目標が低いのではないかと。

【館長】：人口減少やコロナ禍で先行きが見えない状況という不利な状況を加味した目標値となっている。

【半沢委員】：自分は大阪市立美術館でも委員をしていたが、その時の経験から申し上げますと、外国では撮影OKが当たり前であり、それはなぜかというところ、SNSなどによる情報発信が人の誘導につながっているからである。美術館はもっと、撮影OKとする、SNSでの情報発信に力を入れていくなどの必要があるのではないかと。

【館長】：今年度の企画展においては関係館等の協力の下、カメラ撮影OKとし、今の時代の流れに沿った取り組みを行うことができた。若い世代へのアピールとして有効であり、今後取り組みは必要であると考えている。

【半沢委員】：そういった取り組みをしていけば入館者は増加すると思うが、指標にその努力値が加味されていない点が気になる点である。

【笠原委員】：写真撮影について申し上げたい。自分の勤めているアーティゾン美術館では、コレクションについては撮影OKとしており、海外の例をとって評価されることが多いが、企画展の場合は著作権の問題が大きい。ただ、シャッター音がうるさいとのマイナス評価もあるので、いいところだけではない。

【半沢委員】：もちろん、様々な声があることは理解しているが、インスタ効果は大きいので、支障のない範囲で入館者を増やすために工夫が必要であるということをお知らせしたい。

【笠原委員】：運営計画ということで気になった点を申し上げる。美術館活動の柱は2本立てであり、一つはその美術館が何を調査研究し、企画し、発信するかということと、もう一つはどんな作品を収集するかである。今までのやり方で入館者数を維持していくことは難しい。今までのように、マスコミに依

存した大型企画展一つでどっと入館者を集めるというのではなく、基本的なこと、学芸員が調査研究し、展覧会を企画し、ということをやりにながら入館者を積み上げていくことが、今後は重要になる。福島の場合、3. 11を契機として現代作家が制作した作品があるので、今でなければできない収集や展覧会があるはずで、それを実現するには寄贈だけではとても保たない。福島県立美術館ならではの作品収集や企画ということが重要であり、そのためには作品収集の予算化は、運営計画の中でも非常に重要であるが、いかがか。

【館長】：昨年度の運営協議会でも同様のご意見をいただいたが、なかなか収集予算が付かないのが現状である。計画の指標にも作品収集を盛り込んでいるとおり、引き続き予算化については働きかけてまいりたい。また、学芸員の調査研究についてであるが、令和4年度の企画展には、まさにそういった研究を積み上げた成果といえるような企画もあり、実行委員会方式の企画展とのバランスをとりながら進めてまいりたい。

【舟木委員】：収集点数が指標となっているが、これは点数でよいのか。大事なのは何を収集するか、質の部分ではないかと思うので、点数にこだわらなくてもよいのではないか。

【館長】：指標としては、どうしても数値になってしまうところ。目標値については、過去の実績を踏まえながら設定したものであるもので、達成できない数値ではないと考えている。

【齋藤美保子委員】：寄贈作品について、個人で維持できずに寄贈という話が多いと思うが、ある程度の質を保って受け入れるというのは難しいのではないか。美術館としての収集方針を明確にすることが大事だと考えるが、そのあたりはいかがか。

【副館長心得】：収集方針は創立当初から変わっておらず、ある程度明確になっている。第一に福島県出身やゆかりであること、第二に国内外の優れた作品であることで、このような方針の下、海外作品についてはモネやコロドーといった印象派や、ワイエスやベン・シャーンのようなアメリカの具象的な作品が系統立てて収蔵されている。基金現金もない中、海外作品の収集は難しいが、寄贈についてもこれまでの方針を引き継いで取り組んでいるところである。

【岡部委員】：県の文化振興計画策定に関わっているが、今回の計画ではSDGsの観点が入ってきている。持続可能な社会の実現という観点から、「誰にでも開かれた美術館」という観点が計画に盛り込まれているとよいと思うが、いかがか。

【館長】：資料3ページに記載しているが、これまで取り組んできた視覚障がい者向けのワークショップを継続していければと考えている。

【岡部委員】：ミュージアムの下支えとなる人の育成が重要だと考えるが、多くの美術館でアートコミュニケーター（美術館を拠点にアートを介してコミュニティづくりに取り組む活動を行う人の意味。）の育成に取り組んでいる。県立美術館でも、屋外で行うワークショップなどが該当するのかもしれないが、こういった取組についてはどう考えているか。

【副館長心得】：他館の例を参考に新しいことにチャレンジしたいとは考えているが、今のところ内部での議論が進んでいない段階である。

【齋藤勝正委員】：半沢委員がおっしゃっていたように、情報発信の充実強化について、かなり多くの人に観てもらわなければどんなによい展覧会をやっても意味がないので、ぜひ皆さんが観たいと思うような工夫に取り組んでもらいたい。

【大沼会長】：年度内に策定ということなので、各委員のご意見を考慮し、よりよい運営計画にしてもらいたい。

(3) 令和4年度事業計画（案）の概要について

令和4年度事業計画（案）の概要について、事務局が資料に基づき説明を行った。

《質疑応答》

【齋藤勝正委員】：アートアニュアルは1カ月くらいの開催期間でありながら、作家も作品数も少なく、入館者が少なかったように感じる。以前、在京美術家協会の事務局長と、かつて行っていた企画展「福島の実験家たち」の復活を美術館に要望したことがあるが、この企画展であれば、全国で活躍しているレベルの高い作家の作品をかなりの規模で紹介でき、入館者数にもつながるものと思う。アートアニュアルでは1回あたり2人程度しか紹介できないので、予算の制約があるのであれば、作者から費用を徴収するなどの方法も検討し、もう少し多くの方を紹介できるようにしてはどうか。

【副館長心得】：以前も齋藤委員から同様のご意見をいただいたが、在京美術家協会の方たちはある程度キャリアを積んだ方たちなので、アートアニュアルにはそぐわないが、いずれまとまった形で紹介することができないか検討している。

【笠原委員】：私はアートアニュアルは大変いい企画だと思う。学芸員が調査し、作家を選んでいくというのは、まさに美術館の真ん中をいく仕事であり、2

～3人が限度である。若手の作家には支援も必要なので、コミッション・ワーク（依頼制作による恒久展示用のアート作品の意味。）といった形で収集もからめて考えていくのがよいのではないかと思う。この企画では、制作費用や収集費用などはどうなっているのか。

【副館長心得】：今回のアニュアルでは制作補助という形はとっておらず、作家の負担はないようにしている。当館で輸送費などを負担しているので、通常の企画展よりも展示作品数を少なくすることで経費を軽くし、その分観覧料も低く設定しており、多くの方に観ていただけるようにしている。

【笠原委員】：愛知県立美術館の館長から、1億円の予算をかけ、3年で50人の作家を選んで購入していくというプロジェクトを始めるとい話を聞いた。現在活動しているアーティストは、特にこのコロナ禍で疲弊しているので、地元がサポートしていく取り組みが大事だと思う。

【副館長心得】：笠原委員のおっしゃるとおりである。アニュアルは、若手の支援につながるとともに、美術館に関心を持ってもらえるような取り組みであると考えている。

(4) その他（福島県立美術館の運営等について）

【齋藤美保子委員】：この2年間、コロナ禍で県外に行けない状況が続く中、県立美術館があつてよかったとの声を聞いている。来年度も頑張ってもらいたい。

【坂本委員】：齋藤清の作品を雪の中で観てみたいと思い、1月に齋藤清美術館に行ってきたが、大変感動した。同じように、県立美術館の作品に触れ、感じることもたくさんあると思うので、私も多くの方に勧めていきたい。

【齋藤勝正委員】：大規模企画展をやるとき、いつも渋滞し、駐車場が問題となる。美術館でどうにかできる話ではないと思うので、県教育委員会でも、駐車場の拡大など検討してもらいたい。

【半沢委員】：NHK福島放送局は80年を迎えたところ。視聴者モニターから番組に関する様々な意見を聞いてきたが、SDGsやLGBTのように世の中の価値観が多様になっている中、年代も高齢者が多いということもあって、今回、学生部会を立ち上げることにした。いろいろな大学から40人ほど集まり、番組について意見を伺う機会を設けることにしたが、若い人の意見は辛辣である。美術館においても、様々な価値観や世の中のニーズ、トレンドを取り込んでいくことで、さらに館を発展させていってもらいたい。

【議 長】：すべての議題について承認してよいか、お諮りする。

【委員一同】：異議なし。

【議 長】すべての議題を承認する。本日は、館の運営計画という非常に大事な議題もあった。この計画を推進することで、なお一層、県立美術館が県民の皆さまに愛されるよう、取り組んでいただきたい。以上で議事を終了する。

【館 長】長時間にわたる御審議、感謝申し上げます。委員の皆様からいただいた意見を、今後の運営に活かしてまいりたい。

以上をもって、令和3年度福島県立美術館運営協議会を午前11時30分に閉会した。